

# 誕生日会における子ども間の言葉でのやりとりを支える保育者の援助

—ある4歳児クラスの事例をもとに—

中島 寿子・大森 洋子\*<sup>1</sup>

A Study of Kindergarten-Teacher's Support for Children's Interaction in Birthday Party :  
Based on the Case of 4-year-old children's class

NAKASHIMA Hisako, OHMORI Youko\*<sup>1</sup>

(Received December 21, 2018)

キーワード：誕生日会、言葉でのやりとり、4歳児クラス

## はじめに

幼児期の子どもたちにとって誕生日を迎えることはとてもうれしいことであり、多くの園で子どもが誕生日を迎えたその日にクラスで祝ったり、月に一回誕生日を迎えた子どもを全園児で祝ったりする誕生日会が行われている<sup>注1)</sup>。

このように様々な形で行なわれている誕生日会の中でも、本研究では誕生日を迎えた子ども（以下、「誕生日児」と表記する）が友だちから質問してもらい、答えるという言葉でのやりとりを大切にしている4歳児クラスの誕生日会を事例として取り上げたい。そして、保育者はどのような願いからこのような誕生日会の場を設けているのか、子どもたちはそこでどのようなことを経験し、保育者は子ども間の言葉でのやりとりを支えるためにどのような援助をしているのか考察したい。

## 1. 研究の目的

本研究は誕生日児が友だちから質問してもらい、答えるという言葉でのやりとりを大切にしている4歳児クラスの誕生日会を事例として取り上げ、保育者はどのような願いからこのような誕生日会の場を設けているのか、子どもたちはそこでどのようなことを経験し、保育者は子ども間の言葉でのやりとりを支えるためにどのような援助をしているのか考察する。

## 2. 研究の方法

### 2-1 研究の対象

Y幼稚園201X年度4歳児クラスの子どもたち22名（男児14名、女児8名）と担任保育者。担任保育者をAとする。Aは25年余りの保育経験を有していた。

### 2-2 観察とインタビューの方法

対象クラスにおいて、必要に応じて保育補助的な働きもしながら参与観察を行なった（以下、参与観察者をBとする）。金曜日の登園から降園までの観察を原則とし、文字記録の他、デジタルカメラを用いて写真や映像でも記録した。一学期13日、二学期12日、三学期11日、計36日の参与観察を行なった。

参与観察の中では、一学期と二学期に各1回、クラスで誕生日会をした場面を観察することができた。この誕生日会の場面については、始めから終わりまでを映像で記録し、後にBが映像記録をもとに保育者と子ども

\*1 山口大学教育学部附属幼稚園

の言動をできる限り文字化した。

参与観察後と二学期後（冬休み）及び三学期後（春休み）に、Bが参与観察をもとにAにインタビューを行なった。誕生会については、二学期に観察した誕生会をもとにインタビューを行なった。その内容はICレコーダーに録音し、後にBが逐語録を作成した。

### 2-3 事例のまとめ方と考察の方法

本研究では、一学期と二学期の誕生会の記録を【事例1】【事例2】としてまとめたものを取り上げ、事例をもとに保育者はどのような願いからこのような誕生会の場を設けているのか、子どもたちはそこでどのようなことを経験し、保育者は子ども間の言葉でのやりとりを支えるためにどのような援助をしているのかを考察した。その際には、一学期から三学期までの他の場面の記録とインタビュー内容も参考にした。

### 2-4 倫理的配慮

研究の目的と倫理的配慮について、園長と対象クラスの子どもたちの保護者に文書と口頭で説明した。その結果、子どもたちの保護者全員から研究協力について書面での承諾を得ることができた。

## 3. 結果と考察

### 3-1 誕生会の内容と保育者の援助

一学期と二学期の誕生会の観察とAへのインタビュー内容をもとに、誕生会の内容を表1にまとめた。

誕生会は、子どもたちが床に座り、前に置いた台に誕生児が立ち、その横に保育者が立つという形で行なわれていた（図1参照）。Aによると、誕生会の内容は4月から同じだということであった。

一学期と二学期の誕生会において、子ども間の言葉でのやりとりを支えるAの援助には共通するものがあった。その主な援助を表2にまとめた。

表1 誕生会の内容

誕生児が前に立つ	誕生児が前に出て、台の上に立つ。保育者が誕生児に手作りの「かんむり」をかぶせる。
消灯する	次に誕生日を迎える子どもが保育室の室内灯を消しに行く。（図1参照）
保育者が誕生児に質問する	保育者が手作りの「マイク」を持ち、誕生児に質問をする（名前、何歳になったか等）。
誕生児がろうそくの火を吹き消す	保育者が布製の「ケーキ」を出して、付属のろうそくに火を灯す。誕生児が火を吹き消す。（ろうそくに火が灯ると「ハッピーバースデートゥーユー」の曲が流れるようになっている）
お祝いの歌を歌い、お祝いの言葉を言う	他児と保育者で「ハッピーバースデートゥーユー」を歌い、「お誕生日おめでとう」とお祝いの言葉を言う。誕生児が「ありがとう」とお礼の言葉を言う。
他児が誕生児に質問する	誕生児が質問する子どもを指名する。指名された子どもは前に出て「マイク」を受け取り、誕生児に質問し、誕生児が答える。誕生児が五名指名した後に、保育者がさらに一名指名する。
点灯する	次に誕生日を迎える子どもが保育室の室内灯をつけに行く。
おやつを食べる	保育者が用意したお菓子を誕生児が一人一人に配り、みんなで食べる。

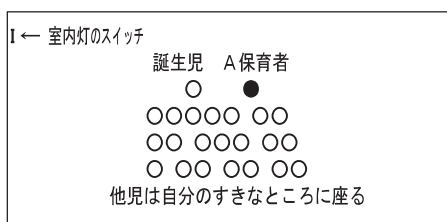


図1 誕生会の場

表2 子ども間の言葉でのやりとりを支える保育者の援助

a 話すよう促したり、話すタイミングを伝えたりする	子どもに話すように促したり、「はい」「どうぞ」等の言葉やしぐさ等で話すタイミングを伝えたりする。
b 子どもに聞く	子どもに質問したり、子どもが言いたいことを確認したり、子どもたちに問いかけたりする。
c 子どもの言葉を繰り返す	子どもの言葉をそのまま繰り返す。
d 子どもの言葉に補足して話す	子どもの言葉に足したり言いかけたりして、他児に伝わりやすくなるように話す。
e 子どもに応える	子どもの言葉に言葉やしぐさ等の様々な方法で応える。
f 話し方、聞き方について伝える	他児に伝わりやすい話し方を伝えたり、子どもが他児に伝わりやすい話し方をした際にほめたりする。話をよく聞いていることをほめたり、話を聞く姿勢になるように促したりする。

### 3-2 一学期の誕生会の事例と考察

一学期の誕生会【事例1】を表3-1、表3-2にまとめた。事例の子どもの名前はすべて仮名である。表2にまとめたAの援助(a~f)に対応する部分には下線を引いた。本文においても、Aの援助についての記述部分に対応する記号(a~f)を( )内に入れて記した(【事例2】も同じ)。

#### 3-2-1 誕生児が前に立ち、保育者が誕生児に質問をする(表3-1(1)参照)

この日は一学期の終業式の日であり、夏休み中に誕生日を迎えるマミの誕生会を行なった。Aは台の上に立つマミの体に両手をそえて①「今から〇〇マミちゃんのお誕生会を始めます」と言い、かんむりをかぶせた。その後、Aはマミに「お名前を聞きます」(b)「どうぞ」(a)と言ってマイクを渡し、マミがマイクを持って答えるようにしていた。このようにすると、「質問する」「答える」というやりとりも楽しくわかりやすくなる。Aは「お誕生日はいつですか？」(b)と聞き、マミが答えた後に他児にも「今日何日か知ってる？」と聞き(b)、なぜ今日マミの誕生会をするのかも理解できるようにしていた。

Aは「今何歳ですか」(b)とも聞き、マミの言葉「もうすぐ5歳になります」を繰り返し(c)、さらに言葉を足しながら「お休みの間に、5歳になります」(d②)と伝えていた。このような援助によって、誕生児は自分の話をきちんと聞いてもらえたと実感でき、他児も誕生児が話したことを理解しやすくなる。また、双方にとって、どのように話すか友だちに伝わりやすいかも具体的に理解しやすくなる。Aはマミに「好きな動物は何ですか？」(b③)と聞き、マミが「ペンギンとうさぎです」と答えると、他児に「ペンギン好きな人」「うさぎ好きな人」(b④)と問いかけ、多くの子どもが「ハイ！」と答えると「おんなじ？」「おんなじだったね」(e⑤)と応えていた。このような援助は、言葉でのやりとりを楽しむだけでなく、「好きなものと同じ」という喜びや友だちとの一体感を感じる<sup>注2)</sup>ことで、「友だちの話を聞こう」という思いをもって参加することを支えることにもなる。

#### 3-2-2 誕生児が指名し、他児が誕生児に質問する(表3-1(2)参照)

誕生会では、子どもたちも誕生児に五名まで質問できることになっており、Aが「質問がある人は」と話している途中から多くの子どもが「ハイ！」と手を挙げていた。このような場があることで、誕生児は「自分のことを聞きたい友だちがたくさんいる」という喜びや、誰に聞いてもらうかを自分で決めて名前を呼ぶ喜びを味わうことができる。他児も、誕生児に自分の名前を呼んでもらい、自分が聞きたいことを質問し、答えてもらう喜びを味わうことができる。ここでマミが一番に名前を呼んだのは、マミが日頃から一緒に遊んだり隣に座ったりすることの多いケンであった。それを見て「やっぱり好きなんだ」と言う子どもがいたら、Aは「好きなお友だちがいるってうれしいねえ」(e⑥)と応え、ケンに質問を促していた(a)。

ケンの質問は「好きな食べ物はなんですか」であり、その後の質問もすべて「好きな〇〇はなんですか」であった。マミは質問に答える時やAが自分の言葉を繰り返して話す時に、笑顔を見せていた。Aが最初にこのように質問したこともあるだろうが、子どもにとって聞いてみたい、答えたい質問でもあるのだろう。

Aはここでも子どもの言葉を繰り返したり(c)、言葉を足したり言いかけたりして(d)伝わりやすくしたり、マミの言葉を受けて「からあげが好きな人」「ショートケーキが好きな人」(b⑦)と問いかけ

たり、質問を受けて「何ケーキがすきなんかなあ」「何の遊びがすきかな」(e⑧)と言ってマミの答えを待ったりしていた。このような援助は、子どもたちが“自分は～だけど、〇〇ちゃんはどうかな”と思いながら、友だちの話を聞くことを支えることになる。Aは他児に話を聞いていたかも問いかけ(f⑨)、聞いたことを答える子どもには認める言葉をかけ(f⑩)、話を聞いていない子どもがいた時には「もう一回言ってあげて」(f⑪)とマミに頼み、全員が話を聞くことができるようにしていた。

表3-1 【事例1】7月15日 マミの誕生日会

<p>(1)誕生日が前に立つ</p>	<p>・マミが台の上に立つ。Aはマミの体に両手をそえ<sup>0</sup>、「今から〇〇マミちゃんのお誕生日会を始めます」と言ってかんむりをかぶせる。</p>
<p>誕生日に保育者が質問する</p>	<p>・Aが「お名前を聞きます<sup>b</sup>。どうぞ<sup>a</sup>。」と言ってマイクを渡す。マミが「〇〇マミです」と言うと、「はい、マミちゃんです。」と言う。続けて「マミちゃん、お誕生日はいつですか?」と聞き、マミが「7がつの26にち」と答えると、「え?26?今日何日か知ってる?」と聞く。「15」という声に応え、Aは「うん。15。」。まだね、お誕生日が来てないの。でも、明日からお休みよね」「今日で夏休みになっちゃうから、マミちゃんおめでとーっていう日がありませんから、今日お誕生日会をします」と話す。</p>
<p>・名前 ・誕生日 ・今何歳か ・すきな動物</p>	<p>・Aが「マミちゃんは今何歳ですか?」と尋ね、マミが「(指で4と示し)4歳だけど」「(指で5と示し)もうすぐ5歳になります」と答えると、「もうすぐ5歳になります。15、16、17…(数えて見せて)あと12回寝たら、お休みの間に5歳になります<sup>d</sup>。」と話す。 ・Aが「では、マミちゃん、すきな動物は何ですか?」と聞くと、マミは「ペンギンとうさぎです」と答える。Aが「(手を挙げて見せ)ペンギンすきな人<sup>b④</sup>」と問いかけると、多くの子どもが「ハイ!」と言う。「おんなじ?」<sup>⑤</sup>じゃ、うさぎすきな人<sup>b④</sup>」と問いかけると、多くの子どもが「ハイ!」と言う。Aは「おんなじだったね<sup>⑥</sup>。」と言う</p>
<p>(2)誕生日に他児が質問する</p>	<p>・Aが「では、マミちゃんに質問が」と話している途中で「ハイ!」と多くの子どもが手を挙げる。Aは「最後まで聞いてよ<sup>f</sup>。マミちゃんに質問がある人、手を挙げて下さい<sup>f</sup>」と言う。「ハイ!」と手が挙がり、Aは「マミちゃんどうぞ。」と言う。 ・マミは「ケンちゃん」と呼び、笑顔になる。Aも「はい、ケンちゃん。前に来て」と言う。「やっぱりすきなんだ」という声に、Aは「すきなお友だちがいるってうれしいねえ<sup>e⑥</sup>ケンちゃん、どうぞ。」と言う。ケンが「すきな食べ物はなんですか?」と聞くと、Aも「あ、食べ物は何ですか<sup>e</sup>。」と言う。マミが「からあげ」と笑顔で答えると、Aも「あ、からあげがすきです<sup>d</sup>。」と言い、「からあげがすきな人<sup>b⑦</sup>」と問いかけると、多くの子どもが「ハイ!」と言う。Aも笑顔で「先生もからあげだーいすき。」と言う。</p>
<p>[一人目] ・すきな食べ物</p>	<p>・Aが「(指で「2」と示して)二人目のお友だち<sup>f</sup>」と言うと、「ハイ!」と手が挙がる。マミが「サエちゃん」と小声で言う。 ・Aは「はい、サエちゃん<sup>c</sup>。」と言い、サエが「すきなケーキはなんですか?」と聞くと、「すきなケーキは何ですか<sup>e</sup>。何ケーキがすきなんかなあ<sup>b⑧</sup>。」とマミの顔を覗き込む。マミが少し考えて「ショートケーキ」と笑顔で答えると、Aも「ショートケーキがすき<sup>c</sup>。」と応える。「すきー、私」という声に「ショートケーキがすき?」先生はチョコレートケーキがすきよ。」と言うと、タクも「オレもすき」と言う。Aが「ショートケーキがすきな人<sup>b⑦</sup>」と問いかけると、多くの子どもが「ハイ!」と言う。</p>
<p>[二人目] ・すきなケーキ</p>	<p>・Aが「(指で「3」と示して)手を挙げて<sup>f</sup>」と言うと、「ハイ!」と手が挙がる。マミは「アヤちゃん」と言う。 ・Aも「アヤちゃん<sup>c</sup>。」と言う。話をしている子どもたちにAが注意する<sup>f</sup>。その間にアヤとマミは小声で話す。Aは「アヤちゃん何て聞いたっけ?」<sup>f⑩</sup>と聞くと、「すきな色はなんですか?」と言う子どもがいる。Aは「あ、よく聞いたつた<sup>f⑩</sup>。」と応え、「答えた?」<sup>b</sup>と聞くと、マミは頷く。Aは「みんな聞いてた?」<sup>f⑩</sup>「もう一回言ってあげて<sup>f⑩</sup>。はい、どうぞ。」と促し、マミは「ピンク」と言う。Aが「はい、ピンクがすきです。すきな色はピンクです<sup>d</sup>。」と言うと、マミは笑顔になる。</p>
<p>[三人目] ・すきな色</p>	<p>・Aが「(指で「4」と示して)」<sup>f</sup>と言うと、「ハイ!」と手が挙げる。マミは「モエちゃん」と言う。 ・モエが「すきな遊びはなんですか?」と聞くと、Aは「ああ、すきな遊びは何ですか<sup>e</sup>。よく質問聞いてるね、みんなね<sup>f⑩</sup>。マミちゃん、何の遊びがすきかな<sup>b⑧</sup>。」と言う。マミが「お人形ごっこ」と答えると、Aも「あ、お人形ごっこがすきです<sup>d</sup>。」と言う。</p>
<p>[四人目] ・すきな遊び</p>	<p>・「ハイ!」と手が挙がる。Aが「最後のお友だち。(指で「5」と示し)五人目<sup>f</sup>」と言う。マミは「もういい」と言ってマイクをAに渡そうとする。Aはマミにマイクを戻してあてるように促す<sup>f</sup>。マミは「カイ君」と言う。 ・Aは笑顔で「あ、よかったねえ、カイ君<sup>e⑩</sup>。」と言う。タクが「でも最後ねー、先生があてる」と言う。「つまんない」という声もする。カイは、「すきな食べ物はなんですか?」と言う。Aが「おいしい<sup>f⑩</sup>。食べ物は聞いた気がするな<sup>f</sup>」「何がすきだったっけ?」<sup>b</sup>と言うと、「からあげ」という声がある。Aが「ケンちゃんが聞いたよね。」「もう一回考えて<sup>f⑩</sup>」と言うと、カイは「すきな恐竜」と言う。「女の子だから」と言うマミに、Aが「恐竜すきじゃない?」と聞くと頷くので、「カイちゃん恐竜のこと聞いたかったから」「恐竜の色とか教えてくれる?」<sup>b⑩</sup>と聞き、マミが「緑」と言うと「あ、緑の恐竜がすき<sup>d</sup>。」と言う。</p>
<p>[五人目] ・すきな恐竜の色</p>	<p>・「ハイ!」と手が挙がる。Aが「最後のお友だち。(指で「5」と示し)五人目<sup>f</sup>」と言う。マミは「もういい」と言ってマイクをAに渡そうとする。Aはマミにマイクを戻してあてるように促す<sup>f</sup>。マミは「カイ君」と言う。 ・Aは笑顔で「あ、よかったねえ、カイ君<sup>e⑩</sup>。」と言う。タクが「でも最後ねー、先生があてる」と言う。「つまんない」という声もする。カイは、「すきな食べ物はなんですか?」と言う。Aが「おいしい<sup>f⑩</sup>。食べ物は聞いた気がするな<sup>f</sup>」「何がすきだったっけ?」<sup>b</sup>と言うと、「からあげ」という声がある。Aが「ケンちゃんが聞いたよね。」「もう一回考えて<sup>f⑩</sup>」と言うと、カイは「すきな恐竜」と言う。「女の子だから」と言うマミに、Aが「恐竜すきじゃない?」と聞くと頷くので、「カイちゃん恐竜のこと聞いたかったから」「恐竜の色とか教えてくれる?」<sup>b⑩</sup>と聞き、マミが「緑」と言うと「あ、緑の恐竜がすき<sup>d</sup>。」と言う。</p>



マミは「五人目」の時に「もういい」と言ってマイクを渡そうとしたため、Aがもう一人指名するように促すと、カイの名前を呼んだ。カイは日頃から一生懸命手を挙げてもらえてもらえないことが多い子どもであったため、Aは「よかったねえ、カイ君」と一緒に喜び（e⑫）、すでに聞いた質問をカイがすると「おいしい」（f⑬）「もう一回考えて」（f⑭）と話し、マミが答えに困る質問をすると、答えられるように聞き直し（b⑮）、カイが「自分の質問に答えてもらった」という喜びを味わうことができるようにしていた。

### 3-2-3 保育者が指名し、他児が誕生児に質問する（表3-2（3）参照）

誕生児が子どもの名前を呼ぶと、日頃から一緒に遊ぶ子どもの名前が多くなる。そのため、Aは最後にもう一名自分が指名することにしており、マミが五人目にカイの名前を呼ぶと、「つまんない」という声とともに「最後ねー、先生があてる」という声も聞かれた。ここでAは誕生会で質問したことがなかったコウに手を挙げていたか確認し（b⑯）、コウが手を挙げると「コウちゃんだけまだ言ってないんだ」「コウちゃんの質問」を「聞きたかった」から（e⑰）と言って指名し、どのように聞くとよいかも具体的に伝えて（f⑱）、コウが自分でマミに質問できるようにしていた。

### 3-2-4 誕生児がロウソクの火を吹き消し、みんなでお祝いの歌を歌い、お祝いの言葉を言う

（表3-2（4）参照）

ロウソクに火を灯す時の消灯・点灯は、次に誕生日を迎える子どもの係にしていた。保育者に「次のお誕生日は」と名前を呼ばれて係を頼まれると、「次は自分が誕生日」という喜びを味わうこともでき、この日名前を呼ばれたサエも笑顔ではりきっていた。Aは、ここでも「どうぞ」（a）と言葉をそえて、声を合わせて歌うことができるようにし、「マーミちゃん」と名前を入れて歌う部分では、誕生会の始まりを伝えた時と同様にマミの体に両手をそえて歌っていた（⑲）。お祝いの言葉を言う時には、Aは「〇〇マミちゃん、お誕生日おめでとうございます」と先に言い始め、Aの言葉に合わせて子どもたちが声を合わせて言えるようにしていた。そして、マミが「ありがとうございます！」と大きな声で言うと、「素敵に」言えたと認める言葉をかけ（f⑳）、写真入りの誕生日カードを渡した。

表3-2 【事例1】7月15日 マミの誕生会（続き）

<p>(3)誕生児に他児が質問する</p> <p>[六人目] (保育者が指名)</p> <p>・すきな車の色</p>	<p>・Aが「では、最後です」と言うと、「ハイ！」と手が挙がる。Aは手を挙げてないコウに「コウちゃん、ないの？手、挙げとった？。」と尋ね、コウが手を挙げると、「あのね、〇〇コウちゃんだけまだ言ってないんだ。〇〇コウ君」とあてる。「早く手を挙げたのに」と言う子どもに、Aは「ごめん」「聞きたかったの。コウちゃんの質問。」と応える。</p> <p>・コウがAに小さな声で「すきな車の色」と言うと、「車の色？じゃあ、すきな車の色は何ですかって言うてみて。」と応える。</p> <p>・コウが「すきな車の色は何色ですか？」と聞くと、Aも「さあ、マミちゃんのすきな車の色は何色だろう。」と言う。マミが「赤」と答え、Aが「赤い車だって。赤い車がすきな人。」と聞かけると、多くの子どもが「ハイ！」と言う。マミが「お父さんがね、白がすきだから、白にされた」と言うと、Aは「あ、そうなの。マミちゃんは赤い車がすきだけど、お父さんが白がすきだから、白い車にしたんだって。」と言う。「サエちゃんもよ」と言うサエに、Aは「そうなの。」と応える。</p>
<p>(4)消灯する</p> <p>誕生児がロウソクの火を吹き消す</p> <p>お祝いの歌を歌い、お祝いの言葉を言う</p> <p>点灯する</p>	<p>・Aは「先にこれ（ロウソクに火を灯すこと等）するの忘れとった」「今度のお誕生日は夏休みなんです」「〇〇サエちゃん」と言う。</p> <p>・Aはサエを見て、「お休みにお誕生日がくるね」「今度8月30日（二学期始業式の日）に来るでしょ。その日か、その次の日にお誕生会しようね」と話し、「消してください」と言う。サエは保育室の室内灯を消しに行き、笑顔で戻ってくる。</p> <p>・Aがロウソクに火を灯し、マミは曲が鳴のを待つ。曲が鳴ると、Aは「マミちゃんが吹きまーす。どうぞー」と言う。マミが火を吹き消すと、「わあ、消えました。おめでとう」と笑顔で拍手し、「ハッピーバースデーを歌います。じゃあ、どうぞa」と声をかけ、子どもたちが歌い始める。Aも手を叩いて一緒に歌い、「マーミちゃん」の部分では、笑顔でマミの体に両手をそえて歌う。</p> <p>・歌い終わると、Aは「〇〇マミちゃん、お誕生日、おめでとうございます」とおじぎしながら言い、子どもたちも声を合わせて「お誕生日、おめでとうございます」と言う。マミが大声で「ありがとうございます！」と言うと、Aは「わー、素敵にありがとうございます、言えました。」と言い、「これもでした」と誕生日カードを見せる。マミは誕生日カードをずっと手にもって見る。</p> <p>・Aは「サエちゃん、電気つけてください」と言う。サエは室内灯をつけ、笑顔で戻ってくる。Aはマミの首にカードをかける。</p>
<p>(5)おやつを食べる</p>	<p>・Aが「じゃあ、おやつ配るよー」と言い、マミは菓子が入ったカゴを持ち、一人一人にお菓子を配って回る。</p> <p>・Aが「はい、ご挨拶どうぞ。」と声をかけ、子どもたちは「いただきます」と挨拶して、お菓子を食べ始める。</p>

注) 保育者の援助：a 話すタイミングを伝える・促す b 子どもに聞く c 子どもの言葉を繰り返す d 子どもの言葉に補足して話す e 子どもに応える f 聞き方、話し方について伝える

### 3-2-5 誕生児が配ったおやつをみんなで食べる（表3-1（5）参照）

誕生会の最後は保育者が用意したお菓子をママが一人一人に配り、みんなで食べた。自分一人で友だち全員にお菓子を手渡すことも年に一回のことであり、ここでも誕生日を迎えた喜びを味わうことができる。

### 3-3 二学期の誕生会の事例と考察

二学期の誕生会【事例2】を表4-1、表4-2にまとめた。この日は同じ日に誕生日を迎えたショウとケイの誕生会であった。午前保育の降園前であったが、一人ずつ誕生日のお祝いをした。紙幅の都合からショウの誕生日を祝う部分を中心に上げ、【事例1】との共通点と相違点に着目しながら考察していく。

#### 3-3-1 誕生児が前に立ち、保育者が誕生児に質問をする（表4-1（1）参照）

Aは【事例1】と同様に誕生会の始まりを伝えてショウにかんむりをかぶせ、ショウに質問をしてマイクを渡した。ショウは言葉が出てくるまでに時間がかかり、「えっとね」を繰り返して考えながら話していた。Aは【事例1】のようにショウの言葉をそのまま繰り返すことはせず、ショウの話し方には「上手だね」（f①）、答えには「かっこいいね」（e②）と応えていた。また、「〇〇が好きな人ー」と他児に問いかけることもしなかったが、話を聞きながら自分から「オレも」と言う子どもがいた。

【事例1】と同様に、この日もAが話をする間に「ハイ！」と手を挙げる子どもが多く、そのたびにAに確認をされていた。

#### 3-3-2 誕生児が指名し、他児が誕生児に質問する（表4-1（2）参照）

この日の質問も、すべて「好きな〇〇はなんですか」であった。また、名前を呼ばれて前に出て来る時におどけて見せる子どもがいて（一人目：リョウ、五人目：ガク）、子どもたちが笑い出すことがあった。Aはそのような子どもたちの様子をしばらく見守っていたが、あまりにも話し始めないため、「ちゃんと聞いて（質問して）」（f③）「楽しくていいけど」「ふざけると時間がなくなっておやつが食べれません」（f⑧）と言って質問するよう促していた。また、「友だちの話をよく聞こう」と思えるように、「二回あるから誰があたったか覚えといてよ」（f④）「なんて言うか聞いててよ」（f⑤）とも話していた。

「ハイ！」と手を挙げ続けていたものの、名前を呼ばれてから質問を考えている子どももいた（二人目：シュン）。Aはその様子を笑顔で見守りながらも、「ちゃんと考えといて手を挙げないと」（f⑥）と話していた。おどけてなかなか話し始めなかった子ども（五人目：ガク）が「好きな遊びはなんですか」と聞いた時には、「いい質問だねえ」「ちゃんと聞いたら、できるじゃん」（f⑨）と言い、「ちゃんと聞いて」と言いながら頭をなで、落ち着いて話を聞くことができるようにしていた（f⑩）。おどけていた子どもも、具体的な質問を思いつくまでに時間がかかっていたという面があったのかも知れない。

Aが【事例1】のように言葉を繰り返していた（c⑦）のは、小さい声で質問をした子どもの時であった（三人目：ユウ）。また、ここでもショウの話を聞きながら、「オレも」と言っている子どもがいた。

#### 3-3-3 保育者が指名し、他児が誕生児に質問する（表4-1（3）参照）

この日もショウが日頃から一緒に遊ぶことの多い友だちの名前を呼んでいたため、ママ・サエ（【事例1】参照）は「男の子ばかりやね」と話していた。そのため、Aは大声で「ハイ！」と手を挙げ続けていたチカをあてたが、チカも前に出てから質問を考えていた。Aはその様子を笑顔で見守りながらも「考えとってからハイ言わんと」（f⑪）と話し、すでに出た質問をチカが言うと、「それは今聞いたよ」（f⑫）と伝え、「ガクちゃん言った」「うん、ガク君が言った」と言う子どもには「みんなよく覚えとったね」（f⑬）と応えていた。そして、チカが「好きな絵本」と言うと、「好きな絵本」（c⑭）とチカの言葉を繰り返してショウが考えるのを待ち、しばらく考えていたショウが「うさぎのやつ」と答えると、「『どうぞのいす』かね」（b⑮）と確認し、他児にも伝わるようにしていた。そして、「オレも大好き」という子どもの声に「先生も大好き」（e⑯）と応えていた。

表4-1【事例2】11月11日 ショウとケイの誕生日

<p>(1)消灯する誕生日が前に立つ</p> <p>誕生日に保育者が質問する</p> <p>・名前</p> <p>・何歳になったか</p> <p>・好きな食べ物</p> <p>・好きな動物</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aが「<u>ケイちゃん</u>」「電気消すよ」と声をかけ、ケイが保育室の室内灯を消しに行く。</li> <li>・Aが「今日は<u>ショウ君</u>と<u>ケイ君</u>のお誕生日です」と言う。ショウが前に出て台の上に立つ。</li> <li>・Aが「ただいまよりお誕生会を始めます」と言い、ショウにかんわりをかぶせる。</li> <li>・Aはマイクをショウに渡し、「お名前を教えてください」と聞く。ショウは「<u>〇〇ショウ</u>です」と答える。</li> <li>・Aが「あ、上手だね<sub>f⑩</sub>」と言い、「何歳になりましたか?」と聞くと、ショウは「(指で「4」と示して)4歳」と答える。「5歳よ」という声がある。手で「5」と示す子どももいる。Aは「今日から5歳やね。5歳になりました。」と言う。</li> <li>・Aが「好きな食べ物はなんですか?」と聞くと、チカが「ハイ!」と手を挙げ、他にも「ハイ!」と手を挙げる子どもがいる。Aは「え?もう一回言うよ<sub>f⑩</sub>。好きな食べ物はなんですか?」と言うと、誰も手を挙げない。Aは「だよねえ」と言う。ショウは「えっと、卵焼き」と答える。Aは「え、卵焼きが好きなん。お母さんが作ってくれるん。」と言う。「<u>オレも好き</u>」という声がある。また「ハイ!」と手を挙げる子どもに、Aは「<u>今先生なんか言ったっけ?</u>」「<u>言っていないね。あわてんぼさんがいたね<sub>f⑩</sub></u>」と言う。</li> <li>・Aが「好きな動物はなんですか?」と聞くと「ハイ!」と言う子どもがいる。Aは「<u>ショウちゃんに聞いてるんだけどー、大丈夫?なんか、慌ててない?</u>」と言い、「好きな動物はなんですか?」「聞くよ<sub>f⑩</sub>」と言う。「えっとねー、シマウマ」と答えるショウにAは「<u>シマウマが好きな。かっこいいね<sub>⑩</sub></u>」と言う。<u>ユウは「オレも大好き」と言い、タクも「オレも大好き」と言う。</u></li> </ul>
<p>(2)誕生日に他児が質問する</p> <p>[一人目]</p> <p>・好きな色</p> <p>[二人目]</p> <p>・好きな車</p> <p>[三人目]</p> <p>・好きなおもちゃ</p> <p>[四人目]</p> <p>・好きなケーキ</p> <p>[五人目]</p> <p>・好きな遊び</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aが「今からショウ君に」と話している途中で「ハイ!」と手を挙げる子どもがいる。Aが「(泣くふりをして)ちゃんと最後まで聞いて。質問がある人は」「手をあげてくださいって言ってからあげるんよ<sub>f⑩</sub>」と話す間にも「ハイ!」と手が挙がる。Aはショウにマイクを渡し、「はい、じゃあ、あてて。」と言う。ショウは笑顔で「<u>〇〇リョウ君</u>」と言う。リョウはずっこけながら前に出て、マイクを受けとつても笑って話さない。Aはおどけているユウに注意し、「<u>リョウちゃんもちゃんと聞いて<sub>f⑩</sub></u>」と言う。</li> <li>・リョウは「好きな色はなんですか」と聞き、ショウは「えっとー、赤色」と答える。Aも「はい、赤色が好きです<sub>d⑩</sub>」と言う。</li> <li>・「ハイ!」と手が挙がる。ショウは「<u>〇〇シュン君</u>」と言う。Aは「今日ねえ、二回あるから誰があたったか覚えてよ<sub>f⑩</sub>」と言う。シュンは前に出て、マイクを持って考えている。Aは笑顔で「さあ、なんて言うか聞いてよ<sub>f⑩</sub>」「<u>シュンちゃん、考えていて手を挙げないと<sub>f⑩</sub></u>」と話す。シュンは「好きな車はなんですか?」と聞く。ショウは「うんとねえ、フリーダ」と答える。</li> <li>・「ハイ!」と手が挙がる。ショウは笑顔で「えっとねえ、えっと、<u>ユウ君</u>」と言う。<u>マミは「男の子ばかりやね」と言う。サエも「男の子ばかりだ」と言う。ユウが小さい声で「好きなおもちゃは何ですか?」と聞くと、ショウは「車」と答える。</u></li> <li>・Aは「<u>おもちゃは車だつて。好きなおもちゃは何ですか、車だつて<sub>c⑩</sub></u>」と言う。</li> <li>・「ハイ!」と手が挙がる。ショウは笑顔で「えっとねえ、<u>〇〇タク君</u>」と言う。タクは「好きなケーキはなんですか?」と聞く。ショウは「えっとねえ、チョコレートケーキ」と答える。Aは「今日食べるんかね。」とショウと話す。</li> <li>・Aが「はい、(指で数を数えて「5」と示して)五人目<sub>f⑩</sub>」と言うと、「ハイ!」と手が挙がる。チカは大声で「ハイ!」と叫び続けるので、ショウは「シーッ!」と言い、「えっとねえ、<u>ガク君</u>」と言う。ガクは笑顔で足をバタバタさせて歩いて行き、ひっくり返る。子どもたちはゲラゲラ笑い、ケイは「もうガク、起きろー!」と言ってガクのところへ行く。男児数名もついていく。</li> <li>・Aは「楽しくていいけど」「ふざけると時間がなくなっておやつが食べれんです<sub>f⑩</sub>」と言い、ガクを呼んでマイクを渡す。</li> <li>・ガクは「好きな遊びは何ですか」と聞く。Aは「<u>好きな遊び、いい質問だねえ</u>」「<u>ちゃんと聞いたら、できるじゃん<sub>f⑩</sub></u>」と言い、ピョンピョン跳ねるガクの後ろに回り、「ちゃんと聞いて」と言って頭をなで<sub>f⑩</sub>、ショウの言葉を待つ。ショウは「えっとねえ、戦いごっこ」と言うと、Aも「<u>戦いが好きです<sub>d⑩</sub></u>」と言う。<u>ユウは「オレも戦いが好き」と言い、タクも「オレも」と言う。</u></li> </ul>
<p>(3)誕生日に他児が質問する</p> <p>[六人目]</p> <p>(保育者が指名)</p> <p>・好きな絵本</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ハイ!」と手が挙がる。Aは「今年年長で六歳になるから、六人目は先生が決めます」「<u>〇〇チカさん</u>」と言い、「考えてった?」と聞く。チカは前に出て、マイクを持って考える。Aは笑顔で「<u>考えとつてからハイ言わんと。チカちゃん<sub>f⑩</sub></u>」と言う。</li> <li>・チカは「好きな遊びはなんですか?」と言う。Aは「あ、それは今聞いたよ<sub>f⑩</sub>」と言い、「<u>ガクちゃんが言った</u>」「うん、<u>ガツ君</u>が言った」という声に「<u>みんなよく覚えてったね<sub>f⑩</sub></u>」と言う。ユウ「お兄ちゃんとかいますか?」カキ「恐竜とかあるよ」と言う。</li> <li>・「好きなー」と言って考えているチカに、ショウは「早く言って!」と言う。チカが「好きなねえ、絵本はなんですか?」と聞き、Aも「<u>好きな絵本<sub>c⑩</sub></u>」と言う。ショウが「えっとねえ、えっとねえ」としばらく考え、「あのうさぎのやつー」と言う。Aは「<u>うさぎの本?『どうぞのいす』かね<sub>b⑩</sub></u>」と言う。「<u>オレも大好き</u>」と言うユウに、Aは「<u>先生も大好き<sub>c⑩</sub></u>」と応える。</li> </ul>

表4-2【事例2】11月11日 ショウとケイの誕生日会(続き)

(4)誕生児がロウソクの火を吹き消す	・Aは「六人終わりました」「順番間違っちゃった」「こっちは先だったね」と言い、ロウソクに火を灯す。曲が鳴り、ショウが火を吹き消す。Aが「いくよ。せーの。」と声をかけ、子どもたちが「 <u>ハッピーバースデーチューチュー</u> 」を歌う。Aも誕生日カードをショウの首にかけて一緒に歌い、「 <u>ショウちゃん</u> 」のところではショウの両手に手をそえて振る <sup>⑭</sup> 。ショウは笑顔になる。
お祝いの歌を歌い、お祝いの言葉を言う	・歌い終わると、Aは「 <u>〇〇ショウ君、お誕生日</u> 」と言い、子どもたちが「 <u>お誕生日おめでとうございます</u> 」と合わせて言う。Aは「 <u>ございますまで上手に言ったねえ</u> <sup>⑮</sup> 」と言い、ショウの耳元で「 <u>ショウちゃんは?</u> 」と小声で聞く。ショウは「 <u>ありがとう</u> 」と笑顔で言う。Aは「 <u>ショウちゃんはお返事がすごい上手やったね。質問答えるのがすごい上手やったよ</u> <sup>⑯</sup> 」と言う。
点灯する	・Aが「 <u>ケイちゃん電気をつけて</u> 」「 <u>つけてここに来てください</u> 」と声をかけると、ケイは急いで室内灯をつけに行く。
(ケイの誕生日も同じようにお祝いする。消灯・点灯は、次に誕生日を迎えるガクが担当する)	
(5)おやつを食べる	・Aはケイ・ショウにお菓子の袋をそれぞれ用意する。ケイ「 <u>ぼくが配る</u> 」ショウ「 <u>ぼくも配る</u> 」と言い、お菓子を一人一人に配る。 ・Aが「 <u>はいじゃあ、ご挨拶どうぞ</u> 。」と声をかけ、子どもたちは「 <u>いただきます</u> 」と挨拶して、お菓子を食べ始める。

注) 保育者の援助： a 話すタイミングを伝える・促す b 子どもに聞く c 子どもの言葉を繰り返す d 子どもの言葉に補足して話す e 子どもに応える f 聞き方、話し方について伝える

### 3-3-4 誕生児がロウソクの火を吹き消し、みんなでお祝いの歌を歌い、お祝いの言葉を言う

(表4-2(4)参照)

Aはロウソクに灯した火をショウが吹き消すと、この日も「いくよ。せーの」(a)と声をかけ、子どもたちが声を合わせて歌うことができるようにし、歌の中で「ショウちゃん」と名前を呼ぶところでは、ショウの手に両手をそえて、ショウの手を振って見せるようにしていた(17)。そして、「〇〇ショウ君、お誕生日」と言い、子どもたちがお祝いの言葉を声を合わせて言えるようにした。「ございますまで上手に言えたね」(f 18)と話し、Aに促されてショウが「ありがとう」と言うと、ショウにも「答えるのがすごい上手やったよ」(f 19)と認める言葉をかけていた。このように、子どもたちが言葉でのやりとりを丁寧にできていた時、Aは「上手」という言葉で認めていた。

### 3-3-5 誕生児が配ったおやつをみんなで食べる(表4-2(5)参照)

ショウのお祝いとケイのお祝いをした後、ショウ・ケイが配ったお菓子をみんなで食べた。この時も、Aはショウとケイにそれぞれお菓子の袋を渡し、友だち一人一人に自分でお菓子を手渡すことができるようにしていた。

## 4. 総合考察

本研究で取り上げた4歳児クラスの担任保育者Aは、子どもが誕生日を迎えたその日に誕生日会の場を設けるようにしており、内容も4月から同じにしていた。そして、【事例2】のように同じ日に誕生日を迎えた子どもを祝う場合も、二人一緒にではなく、一人一人を同じように祝っていた。Aは【事例2】の後、インタビューの中で「やっぱり誕生日はどの子にとっても、その日が一番その子にとって大切」と語っており、【事例1】【事例2】でのAの援助にも、誕生日という年に一回のうれしい日を迎えた子どもをクラス全員で祝い、一緒に喜ぶ場となるようにという願いが表れていた。

Aは年度当初の5月のインタビューの中で、このクラスの子どものことを「言いたい人たち」と語っており、誕生児は自分のために【事例1】【事例2】のような誕生日会の場が設けられ、みんなにお祝いしてもらっただけでなく、自分のことについて聞かれ、自分が話したことを聞いてもらえることで、さらに喜びが増していることが感じられた。また、他児は誕生児の話を「自分と同じ」「自分は～がすき」と思ったり、日頃の誕生児の姿から「やっぱり」と思ったりしながら聞いていた<sup>註3)</sup>。そして、多くの子どもが「話したい」「名前を呼んでもらいたい」という思いをもち、一生懸命手を挙げており、名前を呼んでもらって前に出て質問をする喜びも感じていた。この子どもたちのように4歳児が「ボクも」「ワタシも」と言うことについて、岩田は「この年齢に特徴的」な「自己の見せびらかしとでも形容できる行動」であると述べており、「自己の世界と比較するだけ仲間の世界が<わたし>の射程に入って」きて「自己を周りの仲間と合わせて調整する姿が育ってくる」ことが「<わたし>を仲間(他者)と比べて際立たせたい」という強い意



識を伴わせることにもなるのではないかと指摘している<sup>6)</sup>。このような時期の子どもたちにとって、誕生会は友だちの話を聞きながら「自分も」という思いが生まれ、その思いを伝えることができる場にもなっていた。

Aは誕生会の場で一人一人の子どもが自分の思いを伝えることができるように聞いたり（b）、話ができるように促したり（a）していた。また、子どもの言葉を繰り返して話したり（c）、言葉を足したり言いかえたりして（d）他児にも伝わりやすくなるようにしていた。そのようなAの言葉を聞くことで、話した子ども自身も自分の思いを理解してくれた、友だちにも伝わったという喜びを味わうことができる。そして、このような援助は子どもたちがどのように話すかと相手に伝わりやすいのかを理解する機会にもなっていた。

Aは子どもの言葉に様々な形で応え（e）、わかりやすく話ができるときや話をよく聞いていた時にほめるようにもしていた（f）。しかし、「言いたい人たち」ではあっても話を聞き続けることは難しいことも多かったため、友だちの話をよく聞くことを意識できるように確認することもあった（f）。

このような援助を繰り返す中で、二学期10月のインタビューでは、Aはクラスで集まる場で「前に座る子どもが増えた」「前がすきな人が増えてきた」と語っており、みんなで集まった場で話を聞く姿勢が育ってきたことが窺えていた。そして、11月の【事例2】では、Aが【事例1】のように子どもの言葉を繰り返したり、「〇〇すきな人」と問いかけなくても、よく話を聞いている子どもや「自分も」と言う子どもが増えていた。その一方で、友だちとの関係もできてきたこの時期の誕生会という楽しい場の中で、おどけて見せてなかなか話さなかったり、手を挙げてはいたが具体的には質問を考えていないという子どももおり、Aはその様子を笑顔で見守りながらも確認していた（f）。

『幼稚園教育要領解説』（2018）には、「友達同士で自由に話せる環境を構成したり、幼児同士の心の交流が図られるように工夫したりすることで、幼児の伝えたいという思いや相手の話を理解したいという気持ちを育てること」や「言葉が伝わらないときや分からないときに、状況に応じた教師が仲立ちをして言葉を付け加えたり、思いを尋ねたりすることで、話が伝わり合うよう援助すること」が必要であることが指摘されているが<sup>7)</sup>、【事例1】【事例2】におけるAの援助はこれらを具体化したものだと言える。

## おわりに

本研究は誕生会という場での子ども間の言葉でのやりとりを取り上げたが、今後は他の場面においても、保育者が子ども間の言葉でのやりとりを支えるためにどのような援助をしているか考察していきたい。

## 注

- 1) 例えば、ある幼稚園<sup>1)</sup>の場合、全園児が集まり、誕生児の保護者も一緒に参加して、その月に生まれた子ども達の誕生会を行ない、その後には各クラスでもお菓子を食べながらお祝いの会をしている。その中で誕生児が「大きくなったら何になりたいか」なども話したりしているという。このような誕生会は、「誕生を祝ってもらうことを通して、自分や友達の成長を感じ、大切にされていること」や「幼稚園の一員であることなどの喜びが感じられるように」という願いをもとに行なわれている。
- 2) このような保育者と子どもとのやりとりについて、岩田（2011）は「ノリ」という言葉を用いて論じており、「私たちの身体は、他者の身体に同調し、そのリズムにノリ、他者とのノリを共有する仕組みを生まれながらにして持っている」ため、「ノリを保育者が自身のパフォーマンスによって具現化すること」で「保育者と子どもたち、あるいは子どもたち同士の豊かなノリの共有が可能になる」と述べている<sup>2)</sup>。岩田（2007）は「ノリ」を「関係的存在としての身体における行動の基底にあるリズムおよびその顕在の程度、すなわちリズム感、また身体と世界との関係から生み出される調子、気分のことである」<sup>3)</sup>と定義しており、この言葉を用いることで、群れや集団の動き方や雰囲気を表したり、演技手や語り手の構え（動き方や発話の仕方）も表すことができると述べている。  
岩田の論を受け、小川（2010）も「保育者と幼児集団との同型的同調や同型的応答が成立する」ことは「保育者と幼児集団との連帯性がつくられる」ことになり、「幼児たちが保育者の担当するクラス集団の中に、共同体的絆をつくること」や「保育者と幼児一人一人との絆づくり」につながると述べている<sup>4)</sup>。
- 3) 小松（2015）は子どもたちは毎日の会話の中で「その場の意味構築を通して動的に『自己』を明確に

する経験」を繰り返しており、「話す相手に応じて異なる『わたし』をつくりあげる」と述べている<sup>5)</sup>。この指摘をふまえると、本研究で取り上げた誕生会の場は、子どもたちが自分のことを話したり友だちの話の聞いたりする中で「動的に『自己』を明確にする経験」をしている場でもあると言える。

## 引用文献

- 1) 森本伊津子・飯島貴子・柿元みはる・辻岡美希・角田三友紀・松田登紀・福西まゆみ・竹内愛：2・3年保育の教育課程－行事資料編-遊びが豊かになる環境作りと教材－，奈良女子大学附属幼稚園研究紀要，第26集資料編，7，2004.
- 2) 岩田遵子：「保育実践への取り組みの実際」について，中山昌樹・小川博久編，遊び保育の実践，ななみ書房，102-112，2011.
- 3) 岩田遵子：現代社会における「子ども文化」成立の可能性－ノリを媒介とするコミュニケーションを通して，風間書房，115，2007.
- 4) 小川博久：遊び保育論，萌文書林，69，2010.
- 5) 小松孝至：会話と子どもの自己のあられ－幼児期の母子の会話の分析から－，発達，ミネルヴァ書房，141，24-28，2015.
- 6) 岩田純一：<わたし>の世界の成り立ち，金子書房，160-161，2011.
- 7) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，フレーベル館，226，2018.

## 参考文献

- 岩田純一：<わたし>の発達－乳幼児が語る<わたし>の世界－，ミネルヴァ書房，2001.
- 小松孝至：ことばの発達と自己，秦野悦子編，生きたことばの力とコミュニケーションの回復，金子書房，3-27，2010.
- 中島寿子・大森洋子：保育者は「帰りの集まり」をどのように構想するのか，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，第42号，89-98，2016.
- 八重津史子：幼児期における自尊感情を育てる取り組み－保育・教育現場における行事や活動を通して，大阪総合保育大学紀要，第12号，97-110，2017.